

軍事史学

第60巻 第2号

巻頭言

台湾近現代軍事史研究の新たな潮流 黄自進、蘇聖雄

中央研究院近代史研究所(以下、中研院近代史所)を中心として発展してきた台湾近現代軍事史研究は、一九六〇年から清末期の研究に始まり、民国期研究を経て、今日では冷戦時代の軍事史に焦点が移ってきた。したがって、台湾近現代軍事史研究を振り返れば、主な成果は軍事制度史、日中戦争史、及び冷戦時代の軍事史の三つの方面に分けられる。

軍事制度史については、法制度面に着目する制度史から、組織がいかに営まれてきたのかを研究するようになった。例えば、張瑞徳の著書『山河・抗戦時期國民政府の軍隊戦力』は、教育、訓練及び參謀制度を主軸にして、國民政府がいかに日本軍と戦ってきたのかを分析した。また、同氏が書いた『無聲的要角・蔣介石の侍從室與戰時中國』は、蔣介石直屬の幕僚組織である侍從室がいかに動員体制を築き、日中戦争に向き合ったのかを探究している。『戰爭中の軍事委員會・蔣中正の參謀組織與中日徐州會戰』及び『戰爭、制度與思想・近代中國參謀本部的興起』という蘇聖雄の二冊の著書では、戦争を通して國民政府の參謀本部がいかに成長してきたのかを、參謀本部役員による西洋的な軍事学の活用などに焦点を当てて考察した。

日中戦争史については、國民の抗敵感情及び國民政府軍の対応を称賛する従来の肯定論から脱却し、複数の史料を用いて國民の敵対意識及び國民政府軍の戦績を客観的に分析している。陳永発の論文『關鍵的一年・蔣中正與豫湘桂大潰敗』は、豫湘桂作戦(日本側呼称「一号作戦」)における敵情の認識をはじめ、防禦戦の対応、部隊の調達、人事の任命に焦点に絞って、蔣介石の失態を探究する。黄自進の論文『九一八事變時期的日中政治動員與軍事作戦』は、満洲事変において小規模の関東軍が短期間にほとんど死傷者を出さずに満洲全体を制圧できたのは、優れた戦略以外に、同軍の政治的な動員力にも注目すべきであると強調した。また、同じく黄が執筆した論文『中日兩國在華北の攻防・以「塘沽協議」為中心』では、熱河防衛戦の失敗の原因が、地元の民衆に支持されなかったことに加えて、戦術の古さと日本軍に対する抵抗の決意の欠如を指摘した。

冷戦軍事史については、新たな史料の公開と併せて、台湾の本土防衛政策と反攻大陸の計画を中心とする研究成果が続々と出版された。李君山の著書『臺灣最後防線・政府治臺後の防空發展』(2011)は、防空訓練をはじめ、防空通信、通報システム、避難所の、大本營の設置などを検討した。陳鴻獻の著書『反攻與再造・遷臺初期國軍の整備與作為』は、檔案記録及び蔣介石の個人情報を利用して、さまざまな段階で策定された大陸反攻計画を詳細に紹介している。彼の研究によれば、『反攻大陸』は単なるスローガンではなく、信念と目標を持った行動であると理解されるべきものである。

台湾近現代軍事史研究は、過去を踏まえつつ、今後も新たな研究視野を開拓しようとするものであるが、その主な担い手は中研院近代史所蔣介石研究班である。同研究班は、蔣介石個人の研究にとどまらず、蔣介石をめぐる軍事史、政治史、外交史の研究にも関心を持ち、特に日中戦争・冷戦史の研究に力を入れようとしている。この研究班の活動と成果に注目すれば、台湾近現代軍事史研究の新たな動向を掌握できると思われる。

(中央研究院近代史研究所研究員・副研究員)